2003.12.6

平成１５年度　第９回学習会（中央会場）資料

進路指導に生かすカウンセリング　～キャリア･カウンセリング～

KAZU

Ⅰ.「進路指導」から「キャリア教育」へ

・中学校，高等学校は本来，進路指導として，進路選択の力を付けていく時期である。しかし，その実態は本来の意味とかけ離れてしまっている。

・中教審答申には学校における職業教育の課題が示されているが，職業教育だけが大切なのではない。もっと早い段階から進路選択に関する力を育てたいということである。

・現在，文部科学省の協力者会議がキャリア教育について検討中である。これまでの進路指導を「キャリア教育」と呼ぶことについて議論を重ねている。進路指導はいかにも職業指導というイメージがあり，「出口」指導ということのようになっている。そのイメージを払拭したい。進路指導は，本来，自分について知ることなどが大切なのに，それが置いていかれてしまった。

・キャリア教育とは何か。一人一人が自分の将来のことを考え，決める，そのために必要な力を身につけることができる方向になるだろう。では，いったいどういう力が必要であり，どういう子どもに育てるのか。このことは，突然出てきたものではなく，これまで言われてきている「生きる力」も直接かかわることになる。

・具体的には，キャリアに焦点化し，それを各時期に育てていくということである。「人間関係形成能力」，「情報活用能力」，「将来設計能力」，「意志決定能力」の４つを育てることが必要になるだろう（＊別資料は各学校段階から考えて整理したものである）。

＜ 2003 年 10 月第１回教育カウンセリング学会シンポジウム，菊池武剋先生の発表より＞

Ⅱ. キャリア･ガイダンスとは何か？　～学校においては「進路指導」

(1)キャリア (Career) とは何か？

・単に，「キャリア＝職業」とは言えない。報酬を受けないボランティアや子供会の役員等も「キャリア」である。日本語に訳しようがなく，「キャリアはキャリア」とした方が使いやすい。キャリアの定義は様々だが，次の Super(1976)の定義はキャリアをうまく捉えている。

> 人生を構成する一連の出来事。自己発達の全体の中で，労働への関与として表現される職業と，人生の他の役割の連鎖。青年期から引退期に至る報酬，無報酬の一連の地位。それには学生，雇用者，年金生活者などの役割や副業，家業，ボランティアなども含まれる。

＜青年期＞→＜成人期＞→＜壮年期＞→＜老年期＞

進路　　職業　　ボランティア　　子供会役員等の役割

生き方そのもの

(2)キャリア･ガイダンス(Career　Guidannce)とは何か？

・学校における指導においても，職業センター等における指導においても，キャリア・ガイダンスが行われる。同じ哲学，理論，技法を背景に持って迫るのであるが，対象となる相手が違うということである。

①学校においては？

・「学校における進路指導は，学校教育の各段階における自己と進路に関する探索的・体験的諸活動を通じて在学青少年みずから自己の生き方と職業の世界への知見を広め，進路に関する発達課題を主体的に達成する能力，態度等を養い，それによって，自己の人生設計のもとに，進路を選択・実現し，さらに卒業後の生活において，職業的自己実現を図ることができるよう，教師が学校の教育活動全体を通して，総合的，体系的，継続的に指導援助する過程である」（日本進路指導学会「学校教育における定義案」，1986）

②職業センター等においては？

・「職業指導とは，職業に就こうとする者に対して，その者に適当な職業の選択を容易にさせ，及びその職業に対する適応性を大ならしめるために必要な実習，指示，助言その他の指導を行うことである」（職業安定法第５条）

(3)キャリア･ガイダンスの起源

・ドイツの Herbart は，学校教育の目的を強固な道徳的品性の陶冶にあるとし，そのために教師は「管理」，「教授」，「訓育」を行うとした。その後，弟子の Rein は「教授」と「指導」（管理＋訓育＋養護）の二つにまとめた。この考えはやがてアメリカに渡り，前者を「instruction」，後者は「guidance」と訳された。

・guidance は，まず職業指導から始まり，その後，中学校における教育の２大機能とは「学習指導」と「職業指導」と言われるようになった。このように，guidance は職業指導として定着したが，徐々にその領域を社会性，人格，健康，余暇などに関する指導へと拡大していき，個々の生徒の生活つまり人格と行動の全ての面にわたり，指導の手が差し伸べられるようになった。

すなわち，教師の仕事は児童生徒に「学習指導」を行うことと，「生徒指導」を行うことである。

【参考；キャリア・ガイダンスは，カウンセリングの源流の一つ】

ＡＰＡ（アメリカ心理学会）がカウンセリングの歴史を調べたところ，その源流に「職業指導運動」，「心理測定運動」，「精神衛生運動」の３つがあることが明らかになった。第１次大戦後にカウンセリングという新しい分野が形成されたが，その時の母体として３つがあった。これら旧来の３分野が合流して，カウンセリングという新分野を形成した。

１．職業指導運動とは？

・たくさんの失業者をどうするか，社会変革をしなければならないという一連の動きがムーブメントとして沸き起こった。その中心人物に Parson がおり，「キャリア・ガ

イダンスの元祖」と呼ばれている。

２．心理測定運動とは？
・フランスに生まれた知能検査がアメリカに伝わり，その後，多くの心理検査がアメリカにおいて開発された。個人の知的，心的状態をいかにして測定するかに主眼が置かれた。

＊知能検査について
・1905 年，フランスの精神医学者，心理学者のビネーがシモンの協力を得て，ビネー・シモン知能測定尺度を開発。
・1916 年，アメリカの心理学者ターマンがビネー式知能検査をアメリカに輸入するにあたり，IQ（知能指数）の概念を導入。ビネー式知能検査を改良して，スタンフォードビネー改訂知能検査を開発。
・日本では鈴木ビネー，田中ビネー知能検査が有名。
・ウェクスラー式知能検査も日本ではよく使われている。ルーマニア出身のウェクスラーが 1939 年に開発したのがウェクスラー・ベルビュー知能検査。６種類の言語性検査と７種類の動作性検査によって構成。言語性 IQ，動作性 IQ，全体 IQ の知能指数が求められる。成人用に WAIS，児童用に WISC（現在は第三版の WISC-Ⅲ），幼児用に WPPSI。

３．精神衛生運動とは？
・精神分析に代表されるように，個人の心の底にある問題を探ることに主眼が置かれた。

【参考；生徒指導の領域と内容】
　教育の機能の一つとして，生徒指導は欠かすことができない。学校において，生徒指導ということでなされている指導は次の６つにまとめることができる。
①学業指導（educational guidance）
・学業が首尾よく遂行されるように指導することを目的とする。（学習興味の喚起，成績不振の診断，学習技術の習得等）

②進路指導（career guidance）
・各生徒が個性に応じて進路を選択できる能力を養うことを目的とする。

③個人的適応指導（personality guidance）
・児童生徒を発達可能性のある人格として捉え，人間としての調和的発達をめざす。（正確に関する悩み解決への支援等）

④社会性指導（social guidance）
・集団，社会の一員としての社会的資質を育成することをねらう。（友人関係の指導，社会習慣，社会徳性の指導等）

⑤余暇指導（leisure-time guidance）
・余暇の選択，善用についての指導。

⑥健康・安全指導（health-safety guidance）
・健康，安全な生活実践に向け，それを可能にする知識，技術の指導。（基本的生活についての指導，性教育等）

(4)なぜ今，キャリア･ガイダンスなのか？

①個人の働き方の変化
・日本における 4.6 %の失業率はついにアメリカを越えた。雇用関係もかつてのように終身雇用として安心できなくなってきている。
・働く形がだいぶ変わってきている。就業人口そのものは横這いだが，内容的には正規職員が減り，パート職員が増えているという実態。一つの会社に籍を置くのではなく，いくつかの会社に出向いていって仕事をする，「派遣労働者」が増えている。通訳やコンピューター関連の仕事など。

つまり，現代は，個人が自分はいったい何ができるのかということを考えざるを得なくなった状態であり，個人としての対応を迫られるような時代になったということである。

②個人に対する企業の対応の変化
・企業もまた現代に流れに合わせようとしている。「うちの会社もいろいろと選択の幅を用意しますよ。でも，それを選ぶのはあなた自身です。」
・「中途採用」を行う企業も増えてきている。これは大学卒を採用するよりも，小企業で働いたり，ボランティアの経験があったりするような人を中途採用する方が，企業メリットが大きいだろうという考え方である。
・「会社を越えて通用する能力」にも着眼するようになってきている。他社で鍛え上げられてきた者で，希望するなら大歓迎という考え方である。
・入社試験の際に，以前なら学歴重視の風潮があったが，今では，出身大学名など問わない企業が多い。「大学で何を学んだのか？」,「我が社で何をしたいのか？」等が問われる時代である。
・従業員のキャリア形成，自己啓発への支援を行う企業も増えている。大学院等へのかかった費用の８割をフィードバックするような制度等。

③学校進路指導に求められる変化
・「生き方の指導」こそ，すべての教育の基本である。学校における進路指導に「職業と労働を取り戻すこと」が求められている。
・「進路や職業を選ぶということは，その人のライフスタイルを決めることである。人は働き方を選ぶ時，単に職業だけでなく同時にライフスタイル，生き方そのものを選んでいる」（木村周，2001）

以上のことを補うのが，キャリア・ガイダンスである。

III. キャリア･ガイダンスを支える理論

1. 特性－因子理論

・進路指導の古典的，伝統的理論。考え方の元祖が Parson。彼の職業指導理論(1909)は，心理測定（テスト）で各個人の特性を明らかにし，職業分析で各職種が必要とする特性を明らかにし，そして各個人が自分の特性に適した職を選ぶという図式である。

＜仮説＞

①生徒は固有の可能性や能力の体系化された型を持っており，それはテストによって確認できる。

②生徒の持つ能力は労働課題と関連がある。

③それぞれの職業群には，そこで成功するための特性群があり，それはテストによって確認できる。

④それぞれの職業群で，各人がそこで成功するのを予測できる。

＊「特性」と「因子」について

・特性とは「測定できる反応」である。例えば「記憶力」は「先生がこれから言う言葉を真似していってみてね」で測定できる。また，「概念化」は「馬はどんなものですか？」という問いに「走るものです」というように答えられるかどうかでその程度を測定できる。それ故に，いずれも「特性」である。この「記憶力」と「概念化」に共通するものは何かというと「言葉の力」と言える。このように共通して捉えられたものを「因子」という。

2. Hollandの構造理論

・構造理論は人と環境との交互作用を重視する。Holland は「類は友を呼ぶ」の考え方に立ち，次の四つの仮説を立てた。

＜仮説＞

①多くの人々は，現実型，研究型，芸術型，社会型，企業型，慣習型のどれかに分類される。

・現実型～物体，道具，機械，動物などを具体的，組織的に取り扱うことが要求される活動を好む。 ・研究型～物理的，生物学的，文化的現象を理解し統制するため，観察的，創造的，体系的研究を含む活動を好む。 ・芸術型～物質，言語，人間を素材として芸術的様式や製品を創造するなど，あいまい，かつ自由で非組織的活動を好む。 ・社会型～他人に対する伝達，訓練，養成，治療，啓発などの活動を好む。 ・企業型～他人に働きかけ,組織目標や経済的利益の達成などにかかわる活動を好む。 ・慣習型～決められた方式や規則，習慣を重視し，それに従って行う活動や反復的で事務的要素の強い活動を好む。

②我々の生活環境も，上記の型に準ずる型がある。

③人は自分の持っている技能や能力を発揮し，自分の価値観や態度を表現し，かつ，自分にあった役割や問題を引き受けさせてくれるような環境を探し求める。

④個人の行動は,その人のパーソナリティと環境の特徴との相互作用によって決定される。

3. Superの発達理論

・日本の進路指導に大きな影響を与えた理論。

・個人は多様な可能性をもっており，様々な職業に向かうことができる。職業発達は個人の全人格的発達の一つの側面であり, 発達の一般的原則に従う発達段階と発達課題がある。職業発達の中核は自己概念である。自己概念を職業を通して実現することをめざした斬心的，継続的，非可逆的なプロセスである。かつ妥協と統合のプロセスである，という考え方。

4. Scheinのキャリア･アンカー

・個人が職業を選択する際には，必ず大事にしたい，こだわりたいというような興味や能力，欲求，価値観，態度といったものがある。「選択する」とは，一方で何かを捨てることであり，人は「捨てきれない何か（大事にしたいもの)」を持っている。Schein は，この「捨てきれない何か（大事にしたいもの)」を総称して「キャリア・アンカー（進路の碇)」と命名し，８つのアンカーを設定した。

・人生という長い航海で，安全な港に停泊するためのその人なりのアンカー。このアンカーは航海（人生）の中で経験を重ね，悩みながら「発達・熟成」する。

【参考；キャリア・アンカーの 8 タイプ】（Schein，1990）

1. 技術力・職能的能力（職人気質タイプ）
2. 管理能力（管理職志向タイプ）
3. 保証・安定（安定志向タイプ）
4. 創造性（クリエータータイプ）
5. 自律・独立（独立志向タイプ）
6. 挑戦・克服（チャレンジタイプ）
7. ライフスタイル（生活第一タイプ）
8. 奉仕・貢献（奉仕タイプ）

【参考；8 つのビジネス・コア機能（Timothy Butler & James Waldroop，1999)】

1. 技術マニア
2. 定量分析マニア
3. 理論人間
4. 創造的生産人間
5. カウンセリング人間
6. 管理志向派
7. 組織のリーダー
8. アイディアマン

Ⅳ．キャリア･ガイダンスの6ステップ

・進路や職業の選択は，次の六つの手順を踏む。人生をどう生きていくかを決めるには，六つの手順を踏むことが大切だが，なかでも選択する前に「やってみること，できれば働いてみること」が大切である。

1．個性理解～自分の個性を吟味し，それを描いてみる

（内容例）
・進路及び職業的適合性はどうか
・人事，労務管理の能力はどうか

（方法例）
・観察法（見て）
・検査法（テストして）
・面接法（会って）

2．職業理解～進路や職業，キャリア･ルートの種類と内容を理解すること

（内容例）　・職業の種類は何があるか

（方法例）　・様々な情報を伝える（印刷物，インターネット等）

3．啓発的な経験～いくつかの選択肢を実際に経験してみること（体験入学，職業実習等）

4．カウンセリング～進路や職業，キャリアに関してカウンセリングを受けること

【参考；キャリア・カウンセリング（Career　Counseling）とは何か？】

１．キャリア・カウンセリングの定義

・「生徒，学生，成人のキャリアの方向付けや，進路の選択・決定に助力し，キャリア発達を促進することを専門領域とするカウンセリング」のことである。日本進路指導学会が，「キャリア・カウンセラー」を認定している。

２．キャリア・カウンセリングを支える理論

・カウンセリングのアプローチは感情に対するもの（精神分析療法，来談者中心療法），思考・認知に対するもの（認知行動療法），行動に対するもの（行動療法）などがあるが，キャリア・カウンセリングはそれらを折衷してのアプローチをとる。

３．キャリア・カウンセリングの特徴

・開発的（育てる）カウンセリングに重点を置く。
・職業選択，キャリア形成などの具体的目標達成を重視する。
・手法としてはシスティマティックアプローチをとる。
・ガイダンスと一体となって行われる。
・理論は折衷法である。役に立つ理論をどんどん取り入れる。
・カウンセリングのみでなく，コンサルテーション，協力，教育の機能を重視する。
・学校，職業相談機関，企業などの社会の各分野を通じて，生涯を通じ継続的に行われる。

5．方策の実行～進学，就職，キャリア･ルートの変更などを意志決定し，実行すること

6．職業適応（追指導）～選択した進路，職業，キャリア･ルートの中で適応し，向上すること

＜参考・引用文献＞

・教職課程講座第７巻　生徒指導～生き方と進路の探求，仙崎武編，ぎょうせい，1990
・エンカウンターで進路指導が変わる，片野智治編，図書文化，2001
・教師養成研究会　教職課程講座７　生徒指導の理論と方法；江川玫成，学芸図書株式会社，1992
・http://www.mc-compass.com/ordinary/html/jibun02c.html
・コーチングの思考技術，ダイヤモンド社，2001
・日本教育カウンセラー協会主催認定講習会資料「キャリア・カウンセリングの理論と実際」，木村周，2000.5 月
・カウンセリングの理論，國分康孝，誠信書房，1980
・カウンセリング心理学入門，國分康孝，PHP 新書，1998

MEMO